

審査員特別賞

奇跡は案外身近なところに

安田学園中学校 2年

小坂 里桜

「自分にも作ることができた！」

私は、完成した紙製のビーズストラップを見て大きな達成感を覚えた。作り始めてから2・3時間は夢中になって作っていたと思う。

私はもともと物を作ることが好きだが、やわらかい紙を使って何か硬い物を作るのは初めてだった。特にアクセサリーは宝石のイメージがあったため、紙を材料にするということに最初は驚いた。でも、細長く裁断された長方形や三角形の紙をつまようじに巻きつけて丸めていくうちに、本当にビーズのような形になっていくのが楽しかった。切る紙の長さや幅によって出来上がるビーズの形が違ってくる。また、色によっても印象が変わるので、自分好みの形や色になるように工夫しながら作っていった。

私は先日、母の友達に貧しい国の女性たちを救う活動をしている人がいることを知った。その人は、2005年に大きな地震があったパキスタンに住んでいる。その地で地震により負傷し、治療費を払えないという理由で家族に見捨てられ、仕方なく施設に入った下半身不随の女性と出会った。彼女との出会いをきっかけに、座ったままでもできる仕事で経済的自立を支援する「ペーパーミラクルズ」というプロジェクトを考案した。施設の女性によって、古新聞や雑誌などを色彩やかなペーパービーズアクセサリーに生まれ変わらせる活動だ。

この活動によって、以前は現金収入が無かった人も、継続的な収入を得られるようになった。その結果、自分の力で生きているという自信が生まれ、笑顔を取り戻し、将来に夢を持つことができるようになっていく。今では、貧困層の女性を含む二千人以上が参加しているという。

この活動は、本来ごみになってしまう物を材料として活用しているという点では、ごみの削減にも一役かっている。また、紙はプラスチックなどよりも環境にやさしい。そして、アクセサリーだけではなく、紙袋やコースターなどにも応用でき、作れる物の幅が広いところも良いところだと思う。

不要な紙からペーパービーズアクセサリーが生まれ、行き場をなくした存在から経済的にも精神的にも自立した強い内面の女性が生まれる。まさに「ペーパーミラクルズ」の名の通り、奇跡のようなすばらしい変化が起きているのだ。

この活動によって救われた貧困層の女性はいくさんいる。彼女達は収入を得る手段を知らないだけで、私達裕福な国の若者よりも、自分自身の力で生きていくことに一生懸命なのかもしれない。もしも私が同じような状況にあったら、自立することを諦め、周りの誰かに助けを求めずにはいられないだろう。だから私は、その生命力を見習い、身近な不用品からお金を生み出す仕組みを意識しながら、一日一日を大切に生きていこうと思う。自分にもきっとできると信じて。